

宮澤賢治と古典 覚書

下 西 善二郎*

(平成十一年四月三十日受理)

要 旨

宮澤賢治における「多種多様な語彙の駆使」は、日本古典文学の領域のことばをもすくいとっている。にもかかわらず、その実態についての具体的考察は、いまだ十分とはいえない。本稿は、ひとつひとつの実例にあたりながら、宮澤賢治における日本古典文学の受容の実態について考察する。総じて、宮澤賢治における古典の受容は、受容のしかたそのものが断片的、また区々であるといわねばならないが、そのなかにもゆたかな古典受容の形跡がみとめられることを明らかにした。

KEY WORDS

宮澤賢治と古典 Miyazawa Kenji & Japanese Classic Literature

【古事記】 KOJIKI

【お伽草子】 OTOGI SUSHI

【平家物語】 HEIKE MONOGATARI

松尾芭蕉 Matsuo Basyou

古典和歌 Japanese Classic Poem

0 「百科全書的詩人」

宮澤賢治が「百科全書的詩人(エンサイクロペディック・ポエツト)」と呼ばれるのは、「多種多様な語彙の駆使者」たる賢治においてしめされるかれの関心領域の広範さにかかわってという。賢治における日本古典への言及も、「百科全書的詩人」賢治の広範な関心の一角をしめすものであるにちがいない。

賢治と古代文学の関連から、『万葉集』の受容については、すで

にのべたことがある。また、「古事記」「ヤマトタケルノミコト白鳥伝説」の撰取についても、考察すべき問題がある。みるところ、その影響は、賢治および賢治詩にとって本質的であったようにおもわれる。

しかし、賢治における古典受容のその他の局面では、その断片的なあらわれかたを一瞥するかぎり、影響は非本質的というほかないようにみえる。賢治の古典受容は、総じて、どのようなもの

としてとらえることができるだろうか。かすかな痕跡をたどってそのなかに、ゆたかな古典受容がかくされているのかどうか、ひとつひとつあたって検証してみるほかあるまい。

以下、実例に就いてその実態をあきらかにし、賢治の古典受容のすがたを彫りだしてみたい。

1 「古事記」

つきにかかげるような『古事記』のとりあげかたは、賢治における古典受容の何をかたることになるだろう。

詩「県技師の雲に対するステートメント」に、

「神話乃至は擬人的なる説述は／小官のはなはだ愧づるところではあるが／仮にしばらく上古歌人の立場に於て／黒く淫らな雨雲に云ふ／（中略）／おまへは却つて小官に／異常な不安を持ち来し／謂はゞ殆んど古事記に云へる／そらを踏む感をなさしめる」（『春と修羅』第三集・一〇七二「県技師の雲に対するステートメント」）

とある。ここで、「神話乃至は擬人的なる説述」という叙法が「仮にしばらく上古歌人の立場に於いて」と仮定的に規定されている点に注意すれば、それが、古代人の感性的ありようにたいする賢治の考え方をしめすものであることがわかる。賢治は、ここで、「神話的説述」ないし「擬人的説述」によってものをいうことが、「上古歌人」がそうであったように、日本古代の人々の自然にたいする態度であった、と考えているのである。「黒く淫らな雨雲に云ふ」とき、「小官」の語るにふさわしい態度は、「上古歌人の立

場に於いて」であり、それは、「雨雲」に「おまへ」と呼びかける「擬人的説述」として、古代の人々の態度であったと考えられているのであろう。そして、その「立場」から、『古事記』が呼びだされてくるのである。

しかし、「謂はゞ殆んど古事記に云へる／そらを踏む感をなさしめる」というとき、『古事記』のどの部分を具体的ににとらえていつているのか、判然指摘することはできない。おそらくそれは、「神話的な説述」としていえば、「雨雲」という存在が「古事記に云へる／そらを踏む感をなさしめる」というのであつて、いわば「古事記」がたちのぼらせている印象的な（空気が（雰囲気）をとらえての表現であるにちがいない。

この詩では、「黒く淫らな雨雲」による「異常な不安」というものが、『古事記』に云へる／そらを踏む感」としてあらわされているだけである、という理解しかできないのではあるまいか。とすれば、『古事記』という書物の名は、まさにそのためだけにもちだされたのである。ここで『古事記』とは、「神話乃至擬人的説述」に対応して登場させられた「上古」の書物の名であるにすぎない。

「古事記」という語は、また、詩「会食」に、

「手蔵氏着くる筒袖は

古事記風なる麻緒であつて」（『春と修羅詩稿補遺』^(*)）

ともみえる。この詩の「古事記風」ということばも、「筒袖」という衣服の形態と質感が、漠然と「上古」の時代をおもいうかべさせる契機となつて、ここによびだされているにすぎないとみるべきものであるだろう。ここでも「古事記風」という語は、「上代（上古）風」の代名詞たるにすぎないのである。

「まがつび（禍津日）」ということばの使用も、『古事記』に關連する用語法である。

「みちべの苔にまどろめば、日輪そらにさむくして、わづかによどむ風くまの、きみが頬ちかくあるごとし。

まがつびここに塚ありと、おどろき離る、この森や、風はみそらに遠くして、山なみ雪にたゞあえかなる。」

（文語詩稿「みちべの苔にまどろめば」）

「雲の鎖やむら立ちや、森はた森のしろけむり、鳥はさながら禍津日を、はなるとばかり群れ去りぬ。」

（文語詩稿「早儉」）

「夜すがら温き春雨に、風信子華の十六は、黒き葡萄と噴きいでて、雫かゞやきむらがりぬ。

さもまがつびのすがたして、あまりにくらきいろなれば、朝焼けうつすいちいちの、窓はむなしくとざされつ。」

（文語詩稿「日本球根商会が」）

『古事記』「上つ巻」によれば、「穢き国」（＝黄泉国）から帰還した伊邪那岐命の、禊ぎの結果として生まれた「八十禍津日の神」、「大禍津日の神」の二神は、「その穢れ繁き国に到りましし時に、汚垢（けがれ）によりて成りましし神ぞ」という悪しき神であった。

賢治の文語詩稿における「まがつび（禍津日）」という語の使用は、その不吉と穢れとまがまがしさの感覚を、詩にあたえている。だが、それは譬喩として招来されたものであって（＝「鳥はさな

がら禍津日を」「さもまがつびのすがたして」、「まがつび（禍津日）」という語じたいの喚起力がこれらの詩を成立させる直接的な原動力となっているのではない。ちなみに、三つめにかかげた「日本球根商会が」先駆形では、「下書稿一」「下書稿二」でも、「まがつび」ということばは使用されていない。発想の当初においては、「まがつび」ということばが使用されずとも、詩は成立しうるものだったことをしめしている。

「上代（上古）」というものをイメージさせ、また、「上代（上古）」の異様な空気を現代にもちこむ道具としての「古事記」は、以上のようなものである。「古事記」という世界がもちえている古代の空気（雰囲気）をみずからの文語詩のなかに醸成するために、古代の文献の名が引用され、古代のことばが借用されたのである。

2 「お伽草子」

童話「十力の金剛石」では、「帽子」のかざりの「蜂雀」が、「お伽草子」に著名な人物名をとりこんでうたっている。

「ポツシャリ、ポツシャリ、ツイツイ、トン。」

はやしのなかにふる霧は、

蟻のお手玉、三角帽子の、一寸法師の

ちいさなけまり」（「十力の金剛石」）

この「蜂雀」の歌に、たとえば「お伽草子」に著名な「一寸法師」の出世物語の全体の受容がある、ということではできない。むしろ、「一寸法師」が「けまり」をする場面などは、お伽草子「一寸法師」にはなく、いわゆる昔話にもないだろう。ここでは、ち

いさな「霧」の粒子が「ちいさなけまり」としてとらえられ、そこに登場すべきはちいさな「一寸法師」がふさわしい、という連想によって書かれたものであるにすぎない。

ただし、賢治が「お伽草子」を読んでいた痕跡は、つぎのような例に確認できる。「酒吞童子」である。

〈初期短編綴等〉の「家長制度」というわずか二頁ほどの短編に、「私」がある。「家」の「主人」に仕える「ひとりの女」の仕事ぶりをみて、

「酒吞童子に連れて来られて洗濯などをさせられてゐるそんなかたちではたらいてゐる」(「家長制度」)¹²

と観察するところがある。

お伽草子「酒吞童子」には、「三社の御神(八幡神・住吉神・熊野神)に先導されて、「千丈嶽を登り」、「細谷川」に到達した「源頼光」一党が、その「河上」を遡上してゆくと、酒吞童子にとらえられ使役されている「十七・八の上臈」に出会う場面がある。

「十七八の上臈の、血の付きたる物を洗ふとて、涙と共に坐す」が、頼光この由(ご覧じて……) (「酒吞童子」)¹³

というのであった。賢治は、「家長制度」で、この「洗濯」の場面を引用しているのではないか。「どっしりがたりと膝をそろへて座つてゐる」という「家」の「主人」が、「酒吞童子」に擬されていることもまたたしかであろう。

だが、この賢治の短編では、「私」は、「どっしりがたりと膝をそろへて座つてゐる」「主人」を征伐にやってきた人物では、もち

ろん、ない。かえって、「主人」の横暴なる行為・ふるまいをまねに、「わたしはまったく身も世もない」というような人物であった。つまり、賢治は、この「家長制度」のなかで、「酒吞童子」の鬼征伐と姫君救出という物語のわくぐみの全体を利用・活用しようとしているのではない。「酒吞童子」の一場面は、「洗濯などをさせられているそんなかたちではたらいてゐる」という「女」を点景させるために、譬喩としてもちいられたにすぎないのである。

3 「平家物語」

賢治短歌に、古典世界にふれるものがある。たとえば、

「熊谷の蓮生坊がたてし碑の旅はるばると泪あふれぬ。」(書簡・二二、保阪嘉内宛、大正五年九月五日付)¹⁴

「農学科二部二年生の土性・地質調査旅行(秩父方面)」¹⁵への旅行先から保阪嘉内にあてた「葉書」に記された全九首のうちの第一首である。

「熊谷の蓮生坊がたてし碑」は、「校本宮澤賢治全集」の(備考)によれば、「埼玉県熊谷市の蓮生山熊谷寺(熊谷直実すなわち蓮生坊が承久一一一九年頃創建)にある石碑(平敦盛追善)。ただし、碑そのものは後代の建立」という。それは、熊谷寺によれば、いわゆる「宝印塔」とよばれるもので、その「建立」は、「墓石自体は鎌倉時代との言い伝え」がある。ただし、「現在、碑文は読みとることができない」。「現在の墓所」については、「江戸時代に、幡随意上人が荒れ果てていた蓮生墓を再建した際に、蓮生墓と並んでいたものを敦盛の供養塔と確認し、再建した」(熊谷寺略縁起)

というものである。^{(*)17}

賢治のみぎの一首は、『校本全集』の〈備考〉が「平敦盛追善」と指示しているように、『平家物語』巻九「敦盛最期」に関連するだろう。『平家物語』(覚一本)によれば、直実・敦盛物語の核心は、熊谷直実の「発心のおもひ」をかたるところにある。直実・敦盛物語は、覚一本では、熊谷直実の発心譚に収束してゆくのである。「我子の小次郎がよはひ程にて容顔まことに美麗」なる「敦盛」(ただし、覚一本では「名乗り」はない)の「頸」を、直実は、「泣く泣く」斬る。

「あはれ、弓矢とる身ほど口惜かりけるものはなし。武芸の家に生れずは、何とてかか、るうき目をばみるべき。なまけなうもうちたてまつる物かな。」

〔『平家物語』「敦盛最期」〕^{(*)18}

というのが、そのときの直実の感懐であった。そして、このちいさな物語は、「それよりしてこそ熊谷が発心のおもひはす、みけれ。」という発心譚に収束してゆくのである。

かかげた賢治の一首には、この直実・敦盛物語が思ひえがかれてるにちがいない。この歌は、「熊谷の蓮生坊がたてし碑」を目前にし、たんに属目の事物としての石碑を詠んだものではない。「泪」が「あふれ」というのは、「旅はるばると」という状況にあるそのためというような、単純な感傷では、もとよりあるまい。もちろん、「旅はるばると」とは、ただいまの旅行のはるかさ(いま、賢治は、埼玉秩父方面の土性調査旅行中である)をいっている。おなじ葉書(書簡番号・二二)に書きおくれた短歌で、

「はるばるとこれは秩父の寄居町そら曇れるに毛虫を燃す火。」
「はるばると秩父のそらのしろくもり河を越ゆれば円石の碩。」

などと「はるばると」をつたっているのだから。しかし、「はるばると」という旅の感懐だけの理由で「泪」が「あふれ」ているのではない、とすれば、賢治のところが、蓮生坊熊谷直実のころを如実に感じとっているからであり、わかくして討たれた敦盛の身のうえにもおよんでいるからである。賢治は、さきの歌で、直実と敦盛の過去への時間のはるかさをおもひえがいているのである。賢治の関心は広い。賢治の読んだ「文学書」は、「古典にも及んで」^{(*)19}いる。賢治は、ここで、『平家物語』に著名な熊谷直実・平敦盛物語に思いを馳せているにちがいない。^{(*)20}

4 芭蕉

松尾芭蕉もまた、賢治の関心のうちにあつたらしい。

「中尊寺／青葉に曇る夕暮の／そらふるはして青き鐘鳴る」
「桃青の／夏草の碑はみな月の／青き反射のなかにむむりき」

堀尾青史「宮澤賢治年譜」によれば、明治四五年(一九一二)五月二十九日、盛岡中学四年の賢治は、修学旅行で平泉をおとずれ^{(*)22}ている。そこの詠であらう。

しかし、この一首めの歌が、芭蕉『おくの細道』の「三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡はこなたにあり。」以下に述べられる感懐を共有するようにうたっているとみえない。もし、『おくの細道』がふまえられているなら、一首めの「青葉」の語は、「平

「泉」にはそぐわないものとしてしりぞけられたにちがいない。それは、「あらたふと青葉若葉の日の光」の「二荒山・日光」にこそふさわしいのだから。

この歌の「青き鐘」という措辞は、現実に、「鐘」が青銅色の「青」としてあったからである。「鐘」の音が「青き」色としてとらえられている共感的表現、また、「青葉」のなかの「青き鐘」が「青い」音で鳴っている、という〈青の色彩の趣向〉において成立しているこの歌に、芭蕉の中尊寺のおもかげは、ない。「中尊寺」がうたわれながら、「中尊寺」の「光堂」、かの芭蕉の「五月雨の降り残してや」の句に著名な「光堂」そのものが詠まれることはないのである。

しかし、かかげた二首目には、芭蕉『おくの細道』の感懐が共有されているのではないだろうか。この歌は、一読、「桃青の夏草の碑」を属目の事物としてうたうにすぎないようにみえる。六月の陽光に反射する碑面を「青」色として詠んで特徴的な「青き反射」という措辞も、「桃青」という号の「青」に関連づけみちびかれた知的な措辞としてあるようにみえてしまうのである。

だが、けっしてたんにそれだけのものではあるまい。ここで賢治は、『おくの細道』の「夏草や兵どもが夢の跡」の句がぎざまれている「桃青の夏草の碑」の碑文をまねに、「兵どもが夢の跡」におもいをめぐらしている。下旬の「青き反射のなかにねむりき」とは、「夏草の碑」が青々とした周囲につつまれて「ねむっ」ているだけではない。その「ねむり」のなかには、「兵ども」の「夢」がかかえこまれており、そして、その「夢の跡」をみている芭蕉の感懐もが、「ねむっ」ているのである。「ねむりき」という措辞には、芭蕉の句中の「夢」という語が関連づけてうたわれているのである。それが、賢治の短歌によまれたなかみであるだろう。

賢治は、このとき、「夏草の碑」をつうじて芭蕉につながっている。芭蕉句の影響は、また、つぎのような賢治の付合句にみることもできるようにおもわれる。

どゞーを芸者に書かず団扇かな

古びし池に河鹿なきつ、（「句稿」）

『校本全集』『校異篇』所掲の「大橋無価（珍太郎の俳号）氏書簡」によれば、「大正十三年七月の頃賢治先生に邂逅の際拙作数章を供覧す／翌々日それに一々短句を付して返草せられたるもの」という。すなわち、付句の「古びし池に河鹿なきつ、」が賢治の作である。

連歌に対する賢治の関心については、『校本全集』にすでに指摘がある。こころみられた賢治の連歌が、「いわば知的遊戯として」あったにしろ、連歌についての「規約メモ」をのこしているところにも、賢治の関心のふかきをおもわせる。歌仙形式についての規則の大概（折りの呼称名、句数の按配、月・花の定座の位置など）を図表化して覚えとした賢治が、とくに、

「△前々句に類し亦は正反対なるを忌む」

「△春秋は三乃至五句／秋冬は一乃至三句／続ける」

と、内容にわたる注記をほどこしている点に意をそそぐ必要があろう。この注記は、鎖連歌における、いわゆる「去り嫌い」、「同語・同想句の出現連続度数の制限」についていっている。賢治には、この二点が、「連歌一巻の変化と調和とによりて興趣多からしめむことの為」に「なされる連歌の肝要な約束事であることがよく

了解されていたということをしめしめよう。そして、その鎖連歌における約束事としての注意点は、おなじように短連歌の付合においても意をはらうべき要点的なことがらとして理解されたいと考えられるのである。

みぎにかかげた賢治の付合では、前句の艶にしてやや滑稽味のある室内の「俗」の世界に対して、付句は、視線を室外にうつしやつて、古池と河鹿のややもの寂びた「雅」の世界に転換したものととなっている。転換のなかに、賢治の付合の呼吸もあるといえよう。

この付句（古びし池に河鹿なきつ、）には、芭蕉の有名な「古池やかはづとびこむ水の音」に詠みこまれたふたつの素材（「古池」「かはづ」）が撰取されているのではないだろうか。

芭蕉句の「かはづ」は、『万葉集』以来、古典和歌の世界でおおく詠まれてきた「かはづ」、つまり「河鹿」であったと推定される。片桐洋一によれば、とくに平安時代以後、「井手の山吹」とりあわせて詠まれることになる「かはづ」は、ほぼ「河鹿」を意味していた。³⁰芭蕉句の「かはづ」がこの歌語の伝統をうけついでたものであることは、つぎのような逸話によって証されよう。

芭蕉の「古池や」の句の成立にあたって、最初に二句・三句の「かはづ飛びこむ水の音」が成り、ついで、初五文字が案じられた、という。そのとき、成案となった「古池や」の初句は、最初、「山吹といふ五文字」が其角によってあたえられようとした。

「晋子（||其角）が傍らに侍りて、山吹といふ五文字をかぶむらしめむかと、をよづけ侍るに、唯「古池」とはさだまりぬ。」（『葛の松原』）

と『葛の松原』はつたえている。³¹「山吹」という初句をあたえようとした其角の発想は、「かはづ」に「井手の山吹」をとりあわせようとするもので、それは、歌語の伝統をうけつぐものであるといえる。そして、「井手」の「かはづ」とは、「河鹿（かじか）」のことであった。江戸元禄期の俳人にあつても、「かはづ」が、歌語の伝統にそつて「河鹿」としてうけとられるべき一般的状況ではあつたのである。賢治もまた、芭蕉句の「かはづ」を「河鹿」と考えていたのではなかつたらうか。賢治の付句「古びし池に河鹿鳴きつ、」においては、「古びし池」は芭蕉句の「古池」に、そこで鳴く「河鹿」は芭蕉句の「かはづ」にあてられているとみて、あまりはないだろう。

5 古典和歌

みぎには、賢治の短歌および短連歌における芭蕉の影響について、みた。それ以外に、賢治における古典受容につらなると考えられるほかの歌語についてもふれておきたい。

詩「国立公園候補地に関する意見」につきのような句がみられる。「鞍掛山」を「国立公園」のなかの「特に地獄にこしらへる」という構想が語られる場面である。

「死出の山路のほととぎす

三途の川のかちわたし

六道の辻

えんまの序から胎内くぐり

はだしでぐるぐるひっぱりまはし

それで罪障消滅として……」

(「国立公園候補地に関する意見」)^{(*)33}

「死出の山」も「三途の川」も「六道」も「えんまの庁」も、「地獄」にかかわることばであるから、ここに登場すること自体に不審はない。ただ、「死出の山路のほととぎす」ということばつづきが、古典和歌の歌ことばであることにおいて、その関連を問題におかねばならないようにおもわれる。

「死出の山」は、もともとは仏典に根拠をもつことばであった。ただし、それは、偽経たる『十王経』を根拠にしていた。織田得能によれば、「死出の山」は、はじめ、「死の險難を譬へたる迄にて」という比喩として考えられたものであったが、「十王経の偽撰世に出でしより実の山とな」つたのである。^{(*)34}そして、この偽経『十王経』は、速水侑によれば、中国偽撰の「仏説閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土教」にたいし、日本偽撰のものは「発心因縁十王経」といい、日本偽撰のものは、中国偽撰の経説を発展させたものという。^{(*)35}偽作の年代は、「十三世紀なかころ」と推定されている。^{(*)36}

賢治の「死出の山」の知識は、この『十王経』によってえられたものであつたらうか。とするなら、賢治は、同時に、ホトトギスが「別都頓宜寿」という名でよばれるものであつたことをも知ることになつたはずである。『十王経』には、また「ほととぎす」のことが「別都頓宜寿」として出るからである。『十王経』に依拠すれば、「死出の山」と「ホトトギス」がむすびついて賢治に理解されることになる。

ただし、問題はのこる。賢治が所蔵した仏書『国訳大藏経』(和装本全三〇巻、国民文庫、大正六年刊)は、『十王経』をおさめていない。『十王経』本文を読むためには、『大日本統藏経』(靖国紀念、大正元年刊)一の二の乙の二三の四、によらねばならない。

賢治は、これをみていたのであるかもしれない。しかしまた、賢治が『十王経』によって「別都頓宜寿」の語を知つたとして、即座に「是れ杜鵑の和名。へほととぎすを冥土の鳥と為す和俗の巷語に依りしなり」というように理解したかどうか、若干の疑点ものこる。

日蓮の著とつたえる『十王讚歎鈔』は、「死出の山」について説いている。しかし、この著もまた、「死出の山」と「ほととぎす」をむすびつけた理解をしめてはいない。

「心ならず行程に死出の山にいたる。此山高してまた嶮し。いかがして越行べしとも覚えねども、獄卒どもに駆催されて泣泣山路にかゝる。岩のかど劔の如くなれば、歩んとすれども歩まれず。其時獄卒鉄棒を以て打さく、息もつゝかず絶えぬ。さらば其ま、消もせで、面かはりせずやがて活。依之此山を死出の山とは云なり」(『十王讚歎鈔』)^{(*)40}

そこで、日本宮廷社会の歌が、「冥土の使いの鳥」としての「ほととぎす」という考えかたにもとづいて、「ほととぎす」をうたつていたことに注意がおよぶ。

「ほととぎす」が「死出の山」とむすびついてうたわれるのは、それが幽冥界からの使いの鳥であるという理解が宮廷世界に成立していたからにはかならない。そして、幽冥界からの使いの鳥という知識をおしひろめる役割をもつたのも、宮廷の歌だったのである。

そのもつともはやい時期における確実な例は、『拾遺集』(寛弘初年へ一〇〇五―一〇七)の歌にみられる。^{(*)41}

死出の山こえてきつらむほととぎす恋しき人のうへ語らなむ

〔拾遺〕・哀傷・一三〇七

以後、古典和歌は、「死出の山路のほととぎす」をうたうようになる。

草のはに門出はしたりほととぎす死出の山路もかくや露けき

〔金葉〕・雑下・六四五

常よりもむつまじきかなほととぎす死出の山路の友と思へば

〔千載〕・哀傷・五八二

この世にて語らひおかんほととぎす死出の山路のしるべともなれ

〔山家集〕・七五〇

賢治は、「ほととぎす」が、「死出の山路のほととぎす」ということばつづきにおいて古典和歌にしばしば詠まれる題材であったことを知っていたのではないだろうか。むしろ、賢治詩にいう「死出の山路のほととぎす」ということは、古典和歌からえた知識だったのではないだろうか。これらのいずれの和歌によって知ったかを明言できないにせよ、すくなくとも「死出の山路のほととぎす」という古典知識が賢治にあったという推測はなりたつのではないか。

「ほととぎす」については、以上でおえる。

留意してよいちいさな歌語を、ほかにもとめてみよう。たとえば、「銀河鉄道の夜」の「天の川のかささぎ」。

「まあ、あの鳥。」カムパネルラのとりのかほると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱るやうに叫びましたので、ジョバンニはまた思はず笑ひ、女の子はきまり悪さうにしました。まったく河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっばいに列になってとまってちつと川の微光を受けてゐるのでした。

〔銀河鉄道の夜〕

この場面での「かささぎ」の登場は、「銀河鉄道の夜」の流れからみて、点景にすぎない。「何とも云へずきれいな音いろが、とけるやうに浸みるやうに風につれて流れて来る」なかを「汽車」が駆けぬけてゆく、その車窓からの風景の一こま以上の意味をもつことはない。ただ、ここで「かささぎ」の登場にすこし注目したのは、賢治の「銀河鉄道」が、「天の川」にそって敷設されており、一方、陰暦七月七日、七夕の夜に「鵲（かささぎ）」が天の川に橋をかけたすという故事がふまえられているだろうと思われるためである。

「鵲」という鳥は、「日本では佐賀平野を中心に北九州西部の低地にのみ周年棲息する」という。賢治は、現実に「鵲」の生態を目のあたりにすることはなかったろう。おそらく、賢治にとつての「鵲」は、知識的なものである。「銀河鉄道の夜」には、「鳥を捕る人」の節に、「鵲」「雁」「鷺」「白鳥」などの鳥が関連して登場するが、「かささぎ」はその節ではなく、「ジョバンニの切符」の節に、はなれて単独に登場する。その単独的な場面が、「かささぎ」を中心点景物として構成され、「黒い鳥がたくさんたくさんいっばいに列になってとまって」という風景としてえがかれたのである。その描写の発想のもとには、七夕の「鵲の橋」がおもいおこされているのではあるまいか。「かささぎ」が「いっばいに列

になって」と形容されるのも、ゆえないこととは思われない。そして、この「鵲の橋」は、また日本古典和歌の世界に登場するものであった。

いかなれば途絶えそめけむ天の川逢ふ瀬に渡す鵲の橋

〔詞花〕・秋・八七

鵲の雲のかけはし秋くれて夜半には霜やさえわたるらむ

〔新古今〕・秋下・五二二

もちろん、このようなちいさなことばの例では、賢治が直接に古典和歌の「かささぎ」の知識によっているとは断言できようはずもない。しかしまた、古典和歌の受容の可能性をまったく否定できるものでもない。

6 「雑俳」その他

「兄妹像手帳」に「末摘花」の三文字があるのも、賢治の古典受容の可能性の一端をおわせている。

この三文字は、一瞬、「源氏物語」の「末摘花」を想起させる。実際、これについては、「源氏物語」「末摘花巻」に関係づけて「賢治と古典との交渉を暗示するメモ」などと注意されたりしているところのものなのである。

しかし、これが、「源氏物語」の「末摘花」巻およびその女主人公・赤鼻の末摘花をさすものかどうか、にわかには断定しがたいといわねばなるまい。この「末摘花」という三文字が記された手帳のおなじページには、前句・付句と未定稿詩の詩題（「看痴」）が書き記されている。「校本宮澤賢治全集」第十二卷（上）所掲「兄

妹像手帳」の写真版によれば、鉛筆による弧線の指示があつて、前句と付句は、「校本全集」の《補説》がいうように、つぎのようになる。

車中にて

ごたごたや女角力の旅帰り

稲熟れ初めし日高野のひる

『校本全集』の写真版でもあきらかなように、前句と付句は、筆跡がおなじではない。これは、『校本全集』の《補説》が、「前書きと前句は賢治の筆跡ではないから、同行者のものであろうが、誰であるかは不明」というとおりのものであろう。付句の「稲熟れ初めし日高野のひる」が、賢治のものということになる。

そこから、『校本全集』の《補説》がつぎのようになっているのは、みるべきであり、また再検討を要するとかんがえられる。

「なお、一四九頁左上の「末摘花」は、右の付合とも、左の「看痴」以下の詩句とも直接の関係はない。」

これによれば、「末摘花」の三文字は、いかにも単独に、独立的に書きつけられたもののようなのである。たしかに、「兄妹像手帳」のこの付近に、「源氏」「末摘花」の内容をおもわせるような記述はない。すくなくとも、「末摘花」の三文字を単純に「源氏物語」にむすびつけることはできないだろう。

あるいは、「末摘花」は、ベニバナの異称であり、たんにそれを指しているのだろうか。はたまた、「末摘花」は、『万葉集』にでる歌ことばでもあつたから、

外のみに見つつ恋ひなむくれなみの末摘花の色に出でずとも
 (万葉・巻一〇・一九九三)

のような万葉歌が思いうかべられたのであつたらうか。もし、「末摘花」という語が、《補説》のいうように、何の連想も脈絡もなく、手帳のこのページにふと書きおとされたものであるとするなら、「末摘花」ということは、「源氏物語」よりもむしろ、『万葉』のことばとして書きつけられた可能性を推定するほうが無難であるかもしれない。この時期以前、賢治が『万葉集』にしたしんでいたことは確実であるから。

しかし、おそらく、「末摘花」の三文字は、「俳風末摘花」を意味しているのではないか。おなじページに書きつけられた前句と付句とのからみでいえば、『俳風末摘花』の書名が思いうかべられているとみるのが自然ではないだろうか。

「手帳」の前句は、「女角力」の興行がおわつた一団の、「車中」での「ごたごた」とした「旅帰り」のようすを詠んだもの、対して、賢治の付句は、眼を「車中」から車外に転じて、「日高野のひる」の「熟れ初めし稲」をとらえたもの。賢治の付句は、視線の転換をほどこして、前句の世界をのがれた付合となつていと評すべきだが、前句にある「女角力」なる語および「女角力」の一団が喚起するものは、江戸期雑俳の世界につらなるものだったのではあるまいか。『俳風末摘花』は、「大部分『川柳評万句合』を出典とする好色句、いわゆるパレ句のみから成る特異な句集だが、初代川柳撰の佳句のみを集めており嫌らしさが少ない」と評される「川柳狂句集」である。賢治は、雅的世界たる『源氏物語』「末摘花」の世界ではなく、むしろ、前句に触発されて、雑俳「末摘花」の世界を思いうかべて、「末摘花」と書きつけたのではない

か。

以上のほか、「文語詩稿」には、

「このころの師とはならんとも、
 こころを師とはなさざれと、
 いましめ古りしきながらに、
 たよりなきこそこころなれ。」
 (「心相」)

という、たとえば『発心集』の序文にあらわれる文句もみられる。『発心集』のこの句については、『涅槃経』二十などの経論に同趣旨の一節が多く見えるものであるが、「直接」には、源信『往生要集』によるものとされている。

賢治は、おそらく仏典にまなんでいたらう。『往生要集』をみていた可能性が考えられる。『発心集』をみているようなことがあつたらうか。

なおまた、賢治の文語詩には、『万葉集』に特徴的な語法たる「し知らに」があらわれる。たとえば、

「術をもしらに家長たち、
 むなしく風をみまもりぬ。」
 「七月はさやに來れど
 故しらに人はなほ疾み」

などの例をみる。たんに一語法にすぎぬものとはいえず、賢治における万葉受容のひとつにこれを数えあげることでもできるだろう。

賢治と日本古典とのかわり合いの大概を、以上に述べて、本稿をおえる。

総体としてみれば、賢治における日本古典の受容は、量的にきわめてとばしいと評するほかない。そして、受容のしかたそのもの

のが、断片的、また、区々であるといわねばなるまい。そんなかにあつて、別稿で検討した賢治における『万葉集』の受容は、それまた断片的な痕跡において観察されるものであつたにしろ、そのなかみは、存外に古典のうったえの本質的な部分にまで達していたといふことができる。

痕跡を手掛かりに、賢治における日本古典との連関を問うことが、なお必要とされているだろう。賢治における古典受容もまた、発見されることによつて現出する。発見は、賢治の表現世界の理解をさらにもゆたかにするにちがいない。

注

- (1) 原子朗編「宮澤賢治語彙辞典」『序』（原子朗）、一九八九・一〇、東京書籍。
- (2) 拙稿「賢治と『万葉集』—宮澤賢治における万葉受容をめぐつて—」『金沢大学 国語国文』第三号、一九九八・三、をこ参照願ひしたい。
- (3) 「古事記」「白鳥物語」の受容については別稿を用意する。
- (4) 「校本 宮澤賢治全集」第四卷九〇頁、筑摩書房。以下、宮澤賢治からの引用は、筑摩書房版、昭和四八年刊行開始の「校本 宮澤賢治全集」により、「校本全集」第〇巻〇頁としめす。
- (5) 「校本全集」第四卷二三四頁。
- (6) 「校本全集」第五卷七三頁。
- (7) 「校本全集」第五卷八〇頁。
- (8) 「校本全集」第五卷一五四頁。
- (9) 新潮日本古典集成本「古事記」四一頁。
- (10) 「校本全集」第五卷七一頁〜七二二頁による。

- (11) 「校本全集」第七卷一八九頁。
- (12) 「校本全集」第一卷二四五頁。
- (13) 「お伽草子」岩波文庫、二七九頁。
- (14) 「校本全集」第一三卷二六頁。
- (15) ちくま文庫版「宮澤賢治全集」第九卷四一頁の注による。
- (16) 「校本全集」第一三卷四七九頁の《備考》による。
- (17) 以上、熊谷寺副住職・漆間淳郎氏のご教示による。なお、原子朗編「宮澤賢治語彙辞典」に、「一ノ谷合戦で直実が斬つた平敦盛追善碑（碑そのものは後代の建立）」（二〇五頁）とある。

- (18) 岩波日本古典文学大系「平家物語」下巻・二二二頁。
- (19) 小倉豊文「賢治の読んだ本」（栗原敦編「日本文学研究資料新集 宮澤賢治」有精堂、一九九〇・一二所収）。
- (20) 小倉豊文「賢治の読んだ本」および奥田弘「宮澤賢治の読んだ本—所蔵図書目録補訂—」（栗原敦編「日本文学研究資料新集 宮澤賢治」有精堂、一九九〇・一二所収）によれば、賢治所蔵の「日本・東洋古典」に分類される図書として、「帝国百科全書 全二〇〇篇」、「日本文学全書 全二四編」、「帝国文庫 正・続各五〇篇」などの名があがっている。いつの時点でこれらを手に入れたかは不明だが、「日本文学全書」（明治二三年、博文館）第二〇篇に、「平家物語」が収録されており、賢治は、これによつて「平家物語」を読んでいたものであろうか。あるいは、この「平家物語」に発する直実・敦盛物語は、その後、謡曲にもとりあげられたのであるから、その知識によつてゐるかもしれない。前記の奥田論に、賢治所蔵図書として「謡曲通解 全八冊」の名もみえている。
- (21) 「校本全集」第一巻七頁。
- (22) 堀尾青史「宮澤賢治年譜」一九九一・二、筑摩書房。この書の「明治四五年五月二九日」条に、「中尊寺を見学。「文語詩

- 篇」ノートに「中尊寺、偽ヲ云フ僧 義常像 青キ鐘」とある。(四七頁)と指摘されている。
- (23) 『宮沢賢治語彙辞典』五一―六頁。
- (24) 『校本全集』第六卷六〇五頁。
- (25) 『校本全集』第六卷九八〇頁。
- (26) 『校本全集』第六卷九九七頁。
- (27) 『校本全集』第六卷九六五頁。
- (28) 『校本全集』第十二卷(上) 六二〇頁。
- (29) 山田孝雄『連歌概説』岩波書店、一九三七・四、一一―一頁。
- (30) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』(角川書店、昭和五八・一二)によれば、日本古典の世界では、和歌におおくよまれる「かはづ」は、「河鹿」のことであった。ただし、『万葉集』の「かはづ」のすべてが河鹿であり、蛙一般でないという確証はどこにもない。」ともある。
- (31) 支考述『葛の松原』(『校本芭蕉全集』第七卷二四〇頁、富士見書房、平成六・七)。
- (32) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』角川書店、昭和五八・一二。
- (33) 『校本全集』第三卷二〇九頁。
- (34) 織田得能『仏教大辞典』(大蔵出版)「死出の山」の項に、「十王経」に閻魔王国境死天山ノ南門。亡人重過アレバ両莖相逼。破膝割骨。折膚漏髓。死天重死。故言死天」という本文を引く。なお、『日本国語大辞典』(小学館)「死出の山」の項が引例する「十王経」の本文は、つぎのとおりである。「閻魔王国境死天山南門、亡人重過、両基根逼、破膝割膚、折骨漏髓、死而重死、故曰死天、從之亡人入死山」。
- (35) 速水侑『地藏信仰』塙書房、一九七九・六、五一頁。
- (36) 速水侑『地藏信仰』塙書房、一九七九・六、六六頁。なお、『岩波仏教辞典』「十王経」の項に、「唐の藏川述となつてゐる。唐末の一〇世紀ごろの作と考えられる偽経。……なお、
- (37) 織田得能『仏教大辞典』(大蔵出版)「別都頓宜寿」の項。
- (38) 小倉豊文『賢治の讀んだ本』および奥田弘『宮沢賢治の讀んだ本』所蔵図書目録補訂―(いずれも、栗原敦編『日本文学研究資料新集 宮沢賢治』有精堂、一九九〇・一二、所収)によれば、賢治所蔵図書に、「国訳大蔵経」の名がみえるが、これは「十王経」を収録していないから、「十王経」本文を読むためには、「大日本統蔵経」(靖国紀念、大正元年刊)一の二の乙の二三の四 によらねばならない(『総合佛教大辞典上』法蔵館による)。これをみていたのであろうか。
- (39) 織田得能『仏教大辞典』「別都頓宜寿」の項、大蔵出版、昭和五二年新訂版。
- (40) 『十王讚歎鈔』。ただし、引用は、『昭和定本 日蓮聖人遺文 第三卷』、立正大学日蓮教学研究所、昭和五七年版による。
- (41) 「ほととぎす」が「死出の山」との関連においてうたわれているかと考えられている歌が、はやく『古今集』に存する(亡き人の宿にかよはば郭公かけて音にのみ鳴くと告げなむ)古今・八五五)が、この歌は、説がわかれていてその確実な証歌とはならないようである。なお、「死出の山」そのものは、『古今集』「後撰集」にすでに詠まれている。「死出の山ふもとをみてぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて」(古今・七八九)、「きのふまで千代とちぎりし君をわが死出の山路にたづぬべきかな」(後撰・一四〇六)。しかし、これらの歌では、「死出の山」と「ほととぎす」がむすびついてはいない。小倉豊文『賢治の讀んだ本』および奥田弘『宮沢賢治の讀んだ本』所蔵図書目録補訂―(栗原敦編『日本文学研究資料新集 宮沢賢治』有精堂、一九九〇・一二、所収)によれば、

日本古典関係の所蔵図書として、『日本文学全書』（博文館、明治二三）、『帝国文庫』（博文館、明治二六）の名があがっている。しかし、これらの叢書には、八代集は入っていない。べつのものであったのであろう。

(43) 『校本全集』第九卷一二九頁。
小学館『日本大百科全書』「鶴」の項。

(44) 『校本全集』第一二卷（上）一三四頁。

(45) 『宮澤賢治語彙辞典』三七二頁。なお、一九九九年七月に発行された、原子朗著『新 宮澤賢治語彙辞典』（東京書籍）では、この項（「末摘花」）は改訂されて、「傍らの川柳風の連句からは『俳風末摘花』を連想してのものと思われる」等の文言があたらしく付加されている（三八〇頁）。本稿は、それを追認したことになる。

(46) 『校本全集』第十二卷（上）一三四頁。「兄妹像手帳」の一四九頁。

(47) 『校本全集』第十二卷（上）一三四頁の〈補説〉。

(48) 『校本全集』第十二卷（上）一三四頁の〈補説〉。

(49) 『校本全集』第十二卷（上）一三四頁の〈補説〉。
『日本国語大辞典』は、「雑俳・雲鼓評万句合―二「昼日中（ひなか）女角力と札を打」の用例をあげている。

(50) 『俳文学大辞典』「俳風末摘花」の項。角川書店、平成七・一〇。

(51) 『校本全集』第五卷七七頁。

(52) 『校本全集』第五卷七七頁。
新潮日本古典集成・三木紀人校注『方丈記 発心集』四三頁頭注。

(53) 『校本全集』第五卷八〇頁。

(54) 『校本全集』第五卷二五九頁。

(55) 『校本全集』第五卷二五九頁。
（一九九九年四月三〇日受理）

A Study of the reception of Japanese Classic Literature in the works of Miyazawa Kenji

Zenzaburo SHIMONISHI*

ABSTRACT

Miyazawa Kenji, called "Encyclopedic Poet", used a large vocabulary in his works. This paper will enumerate the words and phrases which are quoted from Japanese classic literatures, and discuss the various aspects of his quoting.